

堀田雄大の図画工作科（低学年複式）研究計画

1 本研究で目指す子ども

図画工作科のワーキンググループでは、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージを持ちながら意味や価値をつくりだすこと」という見方・考え方が重視されている。それは、子どもが自分の感覚や感じ方を大切にして造形活動に取り組み、形や色、イメージを基に創造的に考える子どもを目指しているからである。

特に、低学年の表現(2)の「工作」では、「形や色などの造形的な特徴に着目して自分のイメージを基に考える、表すものの仕組みを考えて表す」という見方・考え方が重要である。この見方・考え方を育成するため、今年度私は、低学年複式学級において**既存の知識や経験と新たな情報とを関係付け、イメージを広げて表現する子ども**を目指す。「新たな情報」とは、テーマから連想したり資料から調べたりして得た、表したいものの形や色などの特徴を考えるために必要な情報である。イメージを広げて表現することは、子どもにとって新たな表現方法を見いだすことであり、「意味や価値をつくりだす」ことにつながる。

従来も、[共通事項]を基に、上述の「見方・考え方」の育成を目指してきた。例えば、様々な感覚を生かし、想像を膨らませていくことのできる題材を開発したり、段階的に材料提示を行い材料の特徴を生かした表現方法を身に付けさせたりする指導の工夫である。これらの工夫により、子どもは自分の感覚を基に表したいものを考えたり、材料の特徴を生かすための技能を身に付けたりすることができた。しかし、このような工夫では、材料の特徴を生かす技能は身に付いても、子ども自ら発想する力を高めることはできない。なぜなら、子どもに既存の知識や経験とテーマや材料とを直感的に結び付けさせているだけで、どのように考えれば発想できるかといった思考方法を身に付けさせていないからである。

そこで、技能面の向上とともに、子どもの発想力を育成するための3つの手だてを構想する。

- ① 子どものイメージを広げるきっかけとなる情報が得られるように、他教科等と関連した題材をつくること。
 - ② 子どもが多様な発想をしていくことのできる言葉と、具体的なイメージをもたせるための思考ツールを提示すること。
 - ③ イメージを広げてよりよい表現の工夫ができるように、タブレット端末を用いて作品の評価を記録できるようにすること。
- このように働き掛けることで、目指す姿を具現する。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
<ul style="list-style-type: none"> ○材料の形や色が表す効果に関する知識 ○基礎的な用具を扱う技能 ○材料の特徴を生かす技能 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の表したいことについて発想・構想する力 ○自分のイメージに合わせて材料を用いた表し方を考える力 	<ul style="list-style-type: none"> ○生活の中にある造形的な表現に気付こうとする態度 ○形や色などにより生活を楽しくしようとする態度

3 主張する働き掛け

まず、図画工作科で発揮させたい資質・能力との関連を考えた他教科等の単元を構想する。例えば音楽表現、劇表現、○○発表会のように、子どもが図画工作科と他教科等との関連を意識できる単元である。子どもは題材と出合い、テーマを知る。このとき、表すものの仕組みを例示する。仕組みとは、例えば「○○することで動く仕組み」「○○することで音が出る仕組み」などのものである。子どもは、この仕組みを使って自分ならどんなものをつくらうかと考えている(C0)。

働き掛け1

「多様な解釈のできる言葉」を提示し、連想されるイメージを問う。

様々なイメージを共有させ、問いをもたせるための働き掛けである。

どんなものをつくらうかと考えている子どもに、「多様な解釈のできる言葉」を示す。この言葉は、『ミラクル』『未来』『不思議』というような想像が膨らむような言葉と、「一見意味の分からない言葉の羅列に思えるが、語感を基にすると様々な解釈のできる言葉（例えば、『さーんどじーん』『シュルルン』等）」とを組み合わせたものである。子どもは、「一体どんなものなのだろう」と様々なイメージを巡らせる。

想像を膨らませ始めた子どもに、「この言葉から、どんなものをイメージしますか」と問う。最初は「分からない」という様子も見られるが、次第に言葉の意味や語感から連想して、自分の表したいことについて発想・構想する力(②**思考力・表現力・判断力**)を発揮し、自分なりのイメージをもち始める。ここで、子どもそれぞれのイメージを発表させ、共有する。すると子どもは、「ぼくだったら、どんなものをつくらうかな」と思案したり、「○○のようなものができそう」と予想したりする。思案したり予想したりする姿が見られたら、問いをもったとみなす。そして子どもは言葉の意味や語感から連想されるイメージを基につくっていきそうだと考える。しかし、まだ具体的なイメージが湧かず、何か手掛かりとなる情報がほしいと考えている。

働き掛け2

「マッチングカード」を提示し、表したいものを表すために使うカードを選択させ、選択した理由を問う。

課題解決に必要な情報を収集させ、見通しをもたせるための働き掛けである。

様々なイメージを共有し、問いをもった子どもは、自分の漠然としたイメージをより具体的に考えるための情報を求めている。そこで「マッチングカード」を提示する。「マッチングカード」とは、「乗り物」「果物」「虫」「花」「鳥」「水中生物」「ロボット」といった様々なカテゴリに関するものの写真をカードにしたものである。また、題材と関連させた他教科の学習にかかわるものも含む。子どもは「マッチングカード」の中から、テーマに関するカードの組み合わせを考える（⑤ツール活用能力）。

カードを選択した子どもに、選択した理由を問う。子どもは様々なカードを組み合わせ、具体的なイメージと活動への見通しをもつ。見通しをもった子どもに、設定した材料の中から必要な材料を問い、選択させて造形活動に取り組ませる。子どもは**形や色などの造形的な特徴に着目して自分のイメージを基に考える、表すものの仕組みを考えて表す**という見方・考え方を働かせる。そして、基礎的な用具を扱う技能、及び材料の特徴を生かす技能（①知識・技能）と、自分のイメージに合わせて材料を用いた表し方を考える力（②思考力・判断力・表現力）とを發揮し、自分の表したいものを表す。

働き掛け3

タブレット端末を用いた相互鑑賞（レポート鑑賞）を行わせ、作品のよさや面白さを問う。

表現のよさや面白さ、改善点を共有させ、よりよい表現に気付かせるための働き掛けである。

活動の中間や題材の終末に、タブレット端末を使った相互評価の活動（レポート鑑賞）を行わせる。子どもはレポート鑑賞をすることで、自他の作品のよさや面白さ、自分の表現の改善点に気付く（⑤ツール活用能力）。活動の中間に友達から課題を指摘されたり、友達の表現のよさや面白さに気付いたりすることで、子どもはその後の活動の参考にしようとする（④協働性）。

中間の鑑賞活動後、再度活動に取り組ませる。子どもは、**形や色などの造形的な特徴に着目して自分のイメージを基に考える、表すものの仕組みを考えて表す**という見方・考え方を働かせる。そして、基礎的な用具を扱う技能、及び材料の特徴を生かす技能（①知識・技能）と、自分のイメージに合わせて材料を用いた表し方を考える力（②思考力・判断力・表現力）とを發揮し、改善点や友達の表現で参考にできる点を基に、作品の形や色などに工夫を加える。こうして**既有的知識や経験と新たな情報とを関係付け、イメージを広げて表現する子ども**（Cn）となる。

働き掛け4

表現の過程を振り返らせ、工夫できた点と工夫できた理由を問う。

様々な資質・能力を發揮したことで課題を解決できたことを自覚させるための働き掛けである。作品が完成した子どもに、出来上がった作品と活動中の記録写真やビデオを見せる。子どもは、「このときは〇〇をつくっていたよ」「ここで☆☆さんと話していたとき思い付いたよ（④協働性）」などと発言する。

その後、活動全体を通してよくできた点やどのように工夫できたのかを發表させる。子どもは「『マッチングカード』を使って表したいものを考えることができた（⑤ツール活用能力）」「いろいろな材料の組み合わせ方を考えたらできた（①知識・技能）」「自分のイメージしているものに合わせて、材料を広げたり細くしたりして工夫したらできた（②思考力・判断力・表現力）」というように、様々な資質・能力を發揮し、課題解決できたことを自覚する。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した見方・考え方を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を發揮することができたか。
- ④ 子どもは發揮した資質・能力を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3を受けて、鑑賞前の自分のイメージを広げて、よりよい表現の工夫を考えて表現できたかどうかを、実際の子どもの姿や撮影した映像から判断する。
- ② 働き掛け2、3を受けて、「形や色などの造形的な特徴に着目して自分のイメージを基に考える」「表すものの仕組みを考えて表す」という姿が見られたかどうかを、実際の子どもの姿や撮影した映像から判断する。
- ③ すべての働き掛けにおいて、「マッチングカード」やタブレット端末を使うなど想定した資質・能力を發揮したかどうかを、子どもの発言やワークシート、撮影した映像から判断する。
- ④ 働き掛け4を受けて、發揮した資質・能力を自覚したかどうかを、発言やワークシートの記述から判断する。

5 年間の授業計画

- | | | |
|-------------|------|---|
| (1) 指定研究授業 | (6月) | 「オリジナルウヒアハをつくるー巻き段ボールと特徴を生かした工作ー」(特別活動4時間、図画工作4時間) |
| (2) 中間検討会 | (9月) | 「ミラクル楽器 ムジカーポー音の出る仕組みを利用した工作ー」(音楽2時間、特別活動2時間、図画工作3時間) |
| (3) 初等教育研究会 | (2月) | 「思い出ビックリすごろくーマス目の表現の違いを利用した工作ー」(生活科4時間、図画工作5時間) |